

ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書

京都大学文学研究科博士課程3年 横田悠矢

京都大学・ハイデルベルク大学国際連携文化越境専攻（修士課程）の開設を記念する今回の派遣プログラムでは、ハイデルベルク大学トランスカルチュラル・スタディーズ・センターおよびストラスブール大学日本語学科を訪問し、両大学の修士課程・博士課程を中心とする学生とワークショップ、ディスカッションを行うとともに、現地での市内見学を通じて文化理解を深めることができた。

ハイデルベルク、ストラスブール両大学にて開催された、「アジアとヨーロッパにおける平和と紛争」を主題とするワークショップの発表内容は、日中韓共同編集歴史教科書の意義と課題、朝鮮半島におけるDMZ（非武装地帯）国際ドキュメンタリー映画祭とプロパガンダの関係、東アジア共同体の構想およびその困難、渡辺一夫を通して見たヒューマニズムと狂気、日本海軍の戦後における表象、1920年代から1945年の絵葉書にみる満州、移民集団により生じたドイツ社会の軋轢、シリア騒乱の背景と現状など、時局性を反映したテーマから各国の歴史的経緯を対象とするものまで多岐に渡った。またディスカッションも旺んに行われ、とりわけ西洋における共同歴史教科書作成事例と比較した場合の、日中韓共同編集歴史教科書のイニシアチブの問題や、東アジアの平和に対する北朝鮮の消極的態度、また個人の価値を前提とするヒューマニズムの、現代における有効性といった論点には強い関心を覚えた。

市内見学で訪れた場所のなかでは、ハイデルベルクのドイツシンティ・ロマ資料・文化センター（Dokumentations- und Kulturzentrum Deutscher Sinti und Roma）およびストラスブールの欧州評議会（Conseil de l'Europe）がとくに印象的だった。前者は、東欧・南欧をはじめヨーロッパに歴史的に根付いた少数民族シンティ・ロマの、ドイツ第三帝国での排除と権利剥奪から、ナチス占領下ヨーロッパにおける組織的大量虐殺に至るまでを包括的に取り上げている。政府、虐殺犯側からの視点と個人の日常生活とを往還する展示構成で、数世紀来、地域レベルでは共存状態にあった多数民族と少数民族が、ナチス政権以後分断される迫害の歴史が身に迫って感じられた。また後者は、1949年に設立された、平和の促進を目指して人権、民主主義、法の支配の分野で活動する国際機関で、今回の訪問では議場見学の後、欧州評議会の主要組織とその役割について詳しい説明を受けた。議員会議（Assemblée parlementaire）の構成や閣僚委員会（Comité des ministres）での意思決定、また欧州人権裁判所（Cour européenne des droits de l'homme）における審査といった基本的な内容に加えて、近年の懸案事項であるアルメニア、アゼルバイジャンの紛争問題や、主要な予算分担国であるロシアの拠出金一部停止に伴う財政難など、喫緊の課題とその対策の可能性について現場の声を聞くことができたのは、大きな成果である。

報告者は現在パリに留学中であるが、今回の派遣は専門分野以外の大学院生や研究者と意見交換を行い、またナショナリズムや紛争をはじめとする国際問題の複雑性を再認識する貴重な機会となった。今後多くの人文社会系の修士課程院生が、京都大学・ハイデルベルク大学間で開設されたジョイント・ディグリー制度を通じて、アジアとヨーロッパの架橋に貢献することに期待を寄せるものである。